

# 台湾女流作家三毛研究

## ——「ある月曜日の朝」における二つのモチーフ——

李 丹 丹

キーワード：モチーフ 過去への名残 離れること 残ること 作家の舒凡

はじめに

「ある月曜日の朝」は1967年に発表された、台湾女流作家三毛の小説である。この作品は転校した友人（帕柯）が戻ってきて主人公の「私」（卡諾）と昔よく一緒に遊んだ森の中で半日を過ごしたことを描いている。

台湾研究者の桂文亜はこの小説を三毛の初期作品の中で最もよいものとしている。

「可能在同一時間內發表的《一個星期一的早晨》，是我認為手頭收集她早期文章中最好的一篇。

這篇文章以清新的美感來描述一個炎夏的林中午日，與朋友舊地重遊。

爬樹、涉水、曬太陽，接近自然的歡悅與淡淡追念流光的傷感，交織在一片明快的詩情里。

好像一朵空靈的小草花，逢春雨後的綻放，草葉上還停留黎明新亮的水露。」<sup>1</sup>

（「恐らく『アントニー・私のアントニー』と同じ時期に発表された『ある月曜日の朝』は私が今まで集めた三毛の初期作品の中で最もよいものだと思う。

この作品はさわやかな雰囲気の中で真夏の午前に、友人とかつて一緒に遊んだ林の中で友人と再会することを描いている。

木に登ったり、川を渡ったり、ひなたぼっこをしたりして、自然に接する喜びと過ぎ去った年月を追憶することによって生じた淡い感傷を、明快な詩情に織り交ぜて描いている。

『ある月曜日の朝』は、まるで奇麗な小さな草の花の蕾が春の雨を受けて綻び、葉の上に夜明けの新しい露がまだ残っているような印象である。』

桂氏は作品の雰囲気と内容の2つの面から「ある月曜日の朝」を評価している。雰囲気に対して桂氏は感傷的で明快であると主張している。これは筆者も賛成する。内容について桂氏は自然に接する喜びと過ぎ去った年月への追憶が描かれていると主張している。しかし、この主張は表面的な理解に過ぎないと考えられる。この小

説には一層意味深いモチーフが二つあると考えられる。そこで以下に、その二つのモチーフを考察した上、当時の三毛の生活状態の関係を探ることにする。

## 1. 一つ目のモチーフ：過去への名残。

「ある月曜日の朝」は、時間が止まることなく去っていくことを力を入れて表現している。作者は川のイメージを用いて時間の流れを例える。「ある月曜日の朝」で川が何度も繰り返して描かれる。

「私」が友人の帕柯と再会したばかりの時、木の上から川を見る。

「我在樹上可以看到那河，那是一條沖得怪急的河，一塊塊的卵石被水沖得清潔又光滑。」

（「私は木の上からその河を見ることが出来た。それは流れの速い小さな河で、一つ一つの栗石は水の流れによって清らかで滑らかに洗われていた。」）

その時、友人の帕柯も川を見ている。

「我看看帕柯，她也正在看下面的河」

（「私は帕柯を見ると、彼女も下の河を見ていた。」）

「私」が去年のことを思い出す時、川を描いている。

「小河在紗帽山跟學校交接的那個山谷里流著。」

（「小河は紗帽山と学校が隣接する山谷を流れている。」）

山に来て3時間近く経ち、「私」は林の中で横になり、寝付くところだった。その時作者はもう一度川を描く。

「小河的水仍在潺潺的流著，遠處有汽車正在經過公路。」

（「小河の水がまださらさらと流れていて、遠くで車が道路を走っている。」）

小説の最後で、「私」はバスに乗って山を降りる。その時、川が再度登場する。

「淡水河那樣熟悉的在遠處流著」

（「淡水川は実に馴染んだ風景として遠くを流れていた。」）

上の引用を見ると「ある月曜日の朝」で作者が川を描く時、川が流れていることを強調する傾向が明らかに見てとれる。流れている川が小説の始めの部分、中間部分、終わりの部分に繰り返し描写されていることは意味深い。中国人はしばしば絶

えずに過ぎ去った時間や過ぎ去った出来事を水の流れに例える。いわゆる「古来万事东流水」や「時間如流水」である。この小説の題材、小説全体に対する理解から、作者も時間とすべての出来事が止まらずに過ぎ去っていくことを川の水が流れていくことに寓していると考えるのが自然である。

時間が去っていく。全てのことが過去になる。過去に対して主人公たちはどう思っているのだろうか。

帕柯は過去にこだわっている。友人と一年あまり会っていなく、そしてかつて遊んだところに行くのが一年ぶりであるのにも関わらず、帕柯は過去を忘れるどころか、気持ちは全く過去に留まっている。

i、「“卡諾，離開這兒已經一年多，今天我坐車上山覺得什麼都沒有變過，連心情都是一樣的，要不是辛堤這會兒背著我的相機，我真會覺得我們正是下課了，來這林子里玩的，我沒有離開過。”」

(「“卡諾、ここを離れてもう一年以上経つけど、今朝バスで山に登ってきた時何も変わってないような気がしたわ。気持まであの頃と同じだったのよ。辛提が私のカメラを背負っていなかったら、本当に授業が終わってここに遊びに来ただけで、私がここを離れたことなんかないような気がする。”」)

ii、「“早晨我起來時就一直告訴自己，今天的我不是去新莊，今天我是回華岡去，我就迷惑起來，覺得昨天才上山去過，那地方對我並不意味著什麼，我去也不是去做什麼，整個心境就是那樣的。”」

(「“今朝私は起きてからずっと自分に言い聞かせていた。今日は新莊には行かず、華岡に帰るんだと。でもそのうち戸惑い始めたの。昨日山に行ったばかりで、もうあそこは私にとって別に何の特別な意味もない。私はそこに行っても何をするでもない。全くそんな心境になっちゃったの。”」)

一方、卡諾は帕柯と会った最初の頃にこう話す。

「“帕柯，你早就離開了，你離去已不止一年了，今早在車站見你時，我就知道你真的走了有好久了，要不然再見你時不會有那令人驚異的歡悅。”」

(「“帕柯、あなたはずっと前にここを離れたんだよ。そして一年以上経ったんだよ。今朝バス停であなたを見た時、私はあなたと別れてから本当に長い時間が経ってたってことに気付いた。そうでなきゃ、再会の驚きと喜びは起こらなかつたはずだもの。”」)

卡諾の気持ちは帕柯のように全く過去に留まっているのではないが、過去に対して意識していると言える。

そして、共通の友人（辛堤）のありふれた行動を見て、卡諾と帕柯はついに過去への回想に陥っていく。

「此時帕柯站在我身旁，一雙手在我肩上，我們同時注視著坡下的辛堤，他仍低著頭走著，絲毫沒察覺我們在看他。四周的一切好像都突然寂寥起來，除了風吹過之外沒有一點聲音，我們熱切的注視著他向我們走進，此時，這一個本來沒有意味著什麼的動作，就被莫名其妙的蒙上了一層俱有某種特殊意象的心境。辛堤那樣在陽光下走近，就像帶回了往日在一起的時光，他將我們過去的日子放在肩上；走過橋，上坡，一步一步的向我們接近。」

（「この時、帕柯が私の側に立って、手を私の肩に置いた。私たちは一緒に坂の下の辛堤を見つめていたが、彼はまだ俯いて歩いていて、私たちが彼を見ていることに少しも気づいていなかった。周りの一切が突然寂しくなったようで、吹き過ぎた風のほかに何の音もなかった。私たちは彼がやってくるのをじっと注視していた。この時、このもともと何の特別な意味もない彼の動作が訳も分からずある特殊なイメージを私の心境に呼び起こした。辛堤はそんなふうに太陽の光の中を私たちに向かって、まるで昔一緒にいた頃の光陰を持ってきたようだった。彼は過去の日々を肩にのせて、橋を渡り、坂を上り、一步一步私たちに近づいてきた。」）

この回想の後、次のように卡諾と帕柯の会話がある。この会話から二人の過去を名残惜しむ気持ちが一層見えてくる。

「“帕柯，這個光景就像以前，跟那時一模一樣，帕柯，你看光線怎麼照射在他的頭髮上，去年沒有逝去，我們也沒有再經過一年，就像我們剛剛涉水上來，正在等著辛堤一樣。”

“是的，卡諾，只要我們記得，沒有一件事情會真正過去。”」

（「“帕柯、この光景は昔と同じようだ。あの時と全く一緒だね。帕柯、彼の髪を照らす光線の具合を見たら、去年はまだ過ぎ去ることなく、私たちも一年を過ごしていない。まるでいつものように私たちは河を渡ったばかりで、辛堤を待っているようだね。”

“そうだね、卡諾、私たちが覚えてさえすれば物事は一つも本当には過ぎ去らないよ。”」）

この会話を簡単にまとめてみると、二人が感じているのは時間が経っても過去が過ぎ去っていないということである。しかし言うまでもなく、過去は止まらなく過ぎ去っていくというのが現実である。そのため、ここで作者が表したいのは主人公たちの過去のことを忘れたくない、過去が過ぎ去って欲しくないという気持ちである。

「ある月曜日の朝」の、過去への名残というモチーフは三毛が当時の恋人——作家舒凡の作品から着想を得たものであると考えられる。

舒凡は本名を梁光明と言う。1942年、河北省に生まれ、後に両親と一緒に台湾へ

移る。その後、中国文化大学（台北）演劇学科に入学し、監督専攻を習得する。大学時代、数多くの作品を発表し、1966年、初めての作品集『出走』は文星書店によって出版された。その後も舒凡是小説を書くのに取り組み、1969年二冊目の作品集『行過曠野』を世に問うた後、突然筆を絶った。

歸鴻亭は過去への名残が舒凡の大部分の作品で表しているテーマであると述べている。

「在在（舒凡——筆者）幾乎大部分的小説，帶有一種極易測知的筆法，他的人物、故事都離不開對童年的憶念。換言之，那是他的童年，他的嘉義、宜蘭日子的印象、思想；『戀舊』在他的思維中模糊映現。這從他的『出走』裏七歲的惠拉獨自遊蕩，『拉東那莫畢利』鄉村小學堂的一些孩子，『酢漿草』裏白裙藍上衣胖女孩的印象等的印象裏特別清晰的表現出來。」<sup>2</sup>

（「舒凡のほとんどの作品においては、非常に予測しやすい手法が使われている。彼が描いた人物、物語はどちらも幼い頃への思いから離れてない。言い換えればそれは彼の幼年時代——彼の嘉義と宜蘭で過ごした日々への印象、思いである。『過去への名残』は彼の意識の中にぼんやりと写っている。これは彼の『出走』の中の、七歳の惠ラの独自の遊び、『拉東那莫畢利』の中の、田舎小学校のたくさんの子供、『酢漿草』の中の、白いシャツに青いスカートの太い女の子に対する印象に、はっきり表れている。）」

雑誌『幼獅文藝』の159号には舒凡の作品「獵鴨紀」（「アヒルを狩猟して」）が掲載されている（諸般の事情により、作品を手に入れることができない）。『幼獅文藝』は月刊で、創刊されたのが1954年3月である。年間12号で計算してみると、159号は1967年6月前後のものだとわかる。「獵鴨紀」は5万字近くで、「ある月曜日の朝」（1967年3月に発表）は4千字前後である。創作周期（一般的に作品が長いほど時間がかかる）や編集周期（同じように、一般的に作品が長いほど編集にかかる時間が長い）などの事情を考え、「獵鴨紀」と「ある月曜日の朝」はほぼ同じ時期に書き上げたものと言える。「獵鴨紀」の末尾に次のような登場人物のせりふがある。

「我們對於過去的日子，跟要來的日子，一樣的只保存了他們的觀念，也就是一種想像，我們一輩子沒法離開這種想像的人生；下次我們再記起這次獵鴨的生活時，我們就陷入了一種觀念，也就是一種追溯的想像，老辛，這是一種空幻的人生；真實的東西，卻永遠留不住。」<sup>3</sup>

（「我々は過ぎ去った日々に対してやってくる日々と同じように、その觀念だけを覚えていてる。つまり、一種の想像だ。我々は生涯この想像から離れることができない。今度僕たちがこのアヒルを狩猟したことを思い出した時、僕たちはある種の觀念へ陥る。いわゆる、遡った想像だ。辛さん、これは架空の人生なんだが、真実のことは永遠に留めることができない。）」

歸鴻亭はこの台詞について次のように述べる。

「這裡更明顯的表現出舒凡象徵著『失落一代』的戀舊情結——對於往事懷想的思維」<sup>4</sup>

（「ここで舒凡の『失った一世代』に象徴された過去への名残——昔のことに対する恋しい思い、が一層明らかに表現された。」）

舒凡のこの過去への思いと「ある月曜日の朝」の主人公たちの過去への回想、過去が過ぎ去って欲しくない考えとは似たようなものである。作者たちが表している共同のテーマは過去への名残（「戀舊情結」）である。

「ある月曜日の朝」では他にも舒凡の影を見られるところがある。

例えば「ある月曜日の朝」では5種類の植物の名前が登場する。それは「相思樹」（ソウシジュの木）、「楊桐樹」（サカキ）、「酢漿草」（カタバミ）、「美洲菊」（アメリカ菊）、「橘樹」（オレンジの木）である。三毛の初期作品の中、一つの小説でこれほど植物名を登場させたのはこの小説のみである。

同じ時期の作家舒凡の作品にも植物名がよく出てくる。「獵鴨紀」の中、次のような描写がある。

「到處是見鬼的山、山、山，相思樹、相思樹、相思樹、別的是什麼鬼都沒」<sup>5</sup>

（「いたるところは憎たらしい山、山、山，ソウシジュの木、ソウシジュの木、ソウシジュの木で、他のものは何もない。」）

この時期の舒凡の作品に「酢漿草」という小説もある。要するに相思樹と酢漿草はほぼ同じ時期に書かれた舒凡と三毛の作品に出てくるのである。

また、「ある月曜日の朝」の物語の設定も「獵鴨紀」と似ている。「獵鴨紀」の物語は若者3人が夜中に山の奥まで走って、アヒルを狩猟することである。3人のこの行動は一般的な目から見れば決してありふれたことではない。少し意外性のあることだと言える。「ある月曜日の朝」の物語も3人の若者の間で展開している。3人の友達がある月曜日の朝から樹林で遊ぶことが描かれている。ここでぴんと来ないのは、3人の集まる時間が休みの日曜日や放課後ではなく、平日の月曜日の朝というところである。3人の行動はやはりやや人に意外性を与える。

以上、「ある月曜日の朝」と舒凡の同期作品（特に「獵鴨紀」）と似ている点が複数存在することがわかった。作者2人の恋人同士関係からすると、これはただの偶然だとは考えられない。三毛が「ある月曜日の朝」を創作する時、舒凡の作品を参考した可能性が高い。

2. 二つ目のモチーフ：「離れること」（「出走」）と「残ること」（「留守」）についての考え。

先に述べたように「ある月曜日の朝」の登場人物は「私」(卡諾)、帕柯、辛堤の3人である(奥肯という人は名前だけ書かれて、登場しない)。そして3人のうち主要な登場人物は「私」と帕柯である。帕柯は女の子で、「私」が女の子かどうかははっきり書かれてないが、小説全体の雰囲気から恐らく「私」も女の子だろう。例えば帕柯が両手を「私」の肩に置いたまま、「私」と一緒に辛堤が坂の下からやってくるのを見つめているという場面がある。もし「私」が男の子だとすると、この場面は不自然で、違和感が感じられる。しかし、「私」と帕柯が女の子同士の友達だと理解すれば違和感はない。女同士の友人であるが、「私」と帕柯の性格はかなり違って書かれている。

帕柯は放浪するのが好きである。彼女は去年転校して、そして一学期のうち3回も引越しをする。一方、「私」は放浪することを堪えられない人として描かれる。次の「私」と帕柯との会話を見てみよう。

「カノ、我在你書上寫了新地址，這次搬到大直去了，你喜歡大直嗎？」

「帕柯，你這不怕麻煩的傢伙，這學期你已經搬了三次家了。」

「一切的感覺就是那樣無助，好似哪兒都不是我該定下來的地方，就是暑假回鄉時也是一樣。故鄉古老的屋宇和那終年飄著蔗糖味的街道都不再羈絆我了，這種心情不是一天中突然來的，在年前它就開始一點一滴的被累積下來，那時我覺得長大了，卡諾，我已沒有自己的地方了。」

「帕柯。」

「我喜歡用我的方式過自由自在的日子，雖然我自己不確信我活得有多好。」

「我不喜歡城市，尤其是山下那個城，但我每天回到那里去，帕柯，我是一個禁不起流浪的人。」

「我不會，我每日放學就在街上遊蕩，我跟他們一塊吃小攤逛街直到夜深。」

(「カノ、あなたの本に新しい住所を書いておいたわ。今回は大直に引っ越したの。大直が好き？」

「帕柯、あなたは厄介なことを恐れない人だね。今学期あなたはもう三回も引っ越したのよ。」

「全ての感覚は実に無力だね。まるでどこも私が住み着くべきところではないよう。夏休みに故郷に帰った時も同じ感覚だった。故郷の古めかしい家屋も年中甘蔗糖の匂いが漂う街も二度と私を繋ぎとめることはないの。この気持ちはある日突然来たものじゃなくて、お正月の前からすでに少しずつ育ってきていた。その時、私は大人になったと感じていた。カノ、私にはもう居場所がなくなったの。」

「帕柯。」

「私は私なりの生き方で自由な生活をするのが好きなの。私自身もよく生きていけるかを確信できないけれども。」

「私は都会が好きじゃない。特にこの山の下町。でも私は毎日あそこに帰らなければならぬ。帕柯、私には流浪は堪えられないけど。」

「私は大丈夫。私は毎日学校が終わったあと道をぶらつくの。私は彼らと一緒に

深夜まで露店で物を食べ、道をぶらぶらするの。”

この会話から「私」と帕柯の対照的な個性が見えてくる。帕柯は何の束縛もない自由自在な生活が好きである。そしてそのために転々と放浪する。一方、「私」は放浪することを面倒に思い、転々と居場所を替えることよりむしろ好きでもない町にずっといたい。小説の末尾も同じようなことが書かれている。食事の後、帕柯はまたほかのところに行くことにしたが、「私」は疲れて先に帰ることにする。辛堤の言い方によると「私」はいつでも最後まで遊びきれない人間である（「卡諾永遠是个玩不起的家伙」）。放浪することに堪えられない「私」は1つの居場所に残る。「私」と対比になる帕柯は1つの居場所に縛られずあっちこちに放浪する。この「私」と帕柯の2つ人物像から作者の「残ること」（「留守」）と「離れること」（「出走」）に対する思考が窺い知る。これは「ある月曜日の朝」のもう1つのモチーフと筆者は思う。

このモチーフは、やはり三毛がこの小説を書いた時の生活状態と関わっている。この小説は1967年3月に発表された作品である。『永遠流浪:三毛傳』<sup>6</sup>によると、三毛は1967年の秋にスペインに渡った。一般に出国する考えの芽生えから、本当に外国へ渡るまで、かなりの時間を要するものである。従って、三毛が「ある月曜日の朝」を創作した時、ちょうど出国する考えが芽生えていた可能性は十分ある。体が弱くてそれまで国から出たことのない三毛はきっと心の中で故郷に残るか、離れるか迷っていただろう。そうした心境の下で一つの居場所に残る「私」とあっちこちに放浪する帕柯の人物像を書き上げたのではないかと考えられる。逆にいうと対比的な「私」と帕柯の人物像から、三毛が出国する前の心の中の矛盾や揺れが窺えると言える。また、主人公を残る方に設定したことから、当時の三毛は出国するより、台湾に残る意識が強かったのではないかと考えられる。

---

#### 注

<sup>1</sup> 桂文亞「飛——三毛作品的今昔」（『雨季不再來』、1976年）

<sup>2</sup> 歸鴻亭「評舒凡的『獵鴨記』」（『青溪』、1975年6月号）

<sup>3</sup> 同注2

<sup>4</sup> 同注2

<sup>5</sup> 同注2

<sup>6</sup> 劉克敵、梁君梅著、江蘇文藝出版社、2001年

#### 参考文献

1. 台灣國家圖書館期刊文獻資訊網

[http://readopacl.ncl.edu.tw/nclJournal/search/guide/detail.jsp?sysId=0006510747&dtdId=000075&search\\_type=detail&mark=basic&la=ch](http://readopacl.ncl.edu.tw/nclJournal/search/guide/detail.jsp?sysId=0006510747&dtdId=000075&search_type=detail&mark=basic&la=ch)(2017年12月9日チェック)



---

(信州大学 全学教育機構 非常勤講師)  
2018年1月10日受理 2018年2月5日採録決定